

再スタート2年目の“Fukuoka”、それぞれの挑戦

③優勝争いに加わるケニア勢

●“勝負強さ”を発揮できるか＝ベスウェル・イエゴン（ケニア）

自己記録は2時間6分台でも、“勝負強さ”を持つのがイエゴンという選手だ。アベル・キルイ（ケニア）のような世界大会でのメダル獲得実績も、アベベネゲウオ・デゲファ（エチオピア）のような2時間4分台の記録も持っていない。しかしイエゴンにも優勝の可能性が感じられる。

イエゴンは21年ベルリンを「これまでで最高のレースでした」と振り返る。

2時間06分14秒の自己新記録で2位。そのとき2時間06分47秒で3位だったのが、当時の世界歴代2位記録（2時間01分41秒＝現歴代3位）を持つケネニサ・ベケレ（エチオピア）だった。トラックの5000m&10000mでも世界記録を3回更新し、五輪&世界陸上の金メダルを8個も取ったレジェンド的な選手である。

「暑さの中でのレースになり、私は第2集団で我慢しながら走っていました。落ちてきたベケレ選手に追いつき、引き離して2位になったんです。ベケレ選手は尊敬しているランナー。ファンタスティックでしたね」

ベルリンは他にも2時間5分台の選手が数名出ていたが、それらの選手にも先着した。

今年は4月のウィーンでも2時間06分57秒で2位。自己記録は2時間6分台で、世界トップレベルとは少し開きがあるが、勝負強さを武器に戦ってきた。

●イエゴンが考えている2つのレースプラン

そのイエゴンが今回の福岡国際では「優勝を目標にしています」と、キルイやデゲファに対して勝負を挑む。勝利をつかむには、終盤をどう走るのがカギになると考えている。

「30kmを過ぎて、他の選手がどう動くかを見て考えます。自分のレースをするのか、他の選手の動きに反応していくのか」

自分の力を出し切ることを最優先するなら誰かがスパートしても、残りの距離で自分の力を最大限に発揮するペースを選択する。

しかし勝敗を最優先するなら、スパートした選手を追走する。最後までたずずにペースダウンするリスクもあるが、スパートした選手が先にペースダウンするかもしれない。自身が速いリズムに乗る可能性もある。マラソンではどの選手も、この判断を迫られる。

イエゴンは他の選手の動きに反応するのは「アグレッシブになり過ぎたり、リスクィになったりする」とコメントしている。21年のベルリンも先頭集団に付かない選択をして、後半でベケレを逆転して2位に食い込んだ。イエゴンの中ではこちらの走りがイメージしやすいのだろう。

だが、そのベルリンでは優勝することができなかった。今回の福岡国際でははっきりと、優勝を目標に掲げている。今回ペースメーカーで2時間4分台の記録を持つロナルド・コリル（ケニア）らと、ケニアのイテンを拠点に練習しているが、「福岡に向けて3カ月以上前から準備をしてきました。十分な準備ができて自信がある」と話す。

ベルリンで2位になった頃より力は付いている。30kmからレースが動いたとき、イエゴンがどんな走りを見せるのか。今大会の大きな注目ポイントの1つになる。

●福岡国際を得意とする2人が今年も参戦＝マイケル・ギザエ、ヴィンセント・ライモイ

国内チーム・スズキのケニア勢は今年も福岡に乗り込んでくる。2年前の21年大会ではマイケル・ギザエ（スズキ、ケニア）が2時間07分51秒で優勝。昨年はそのギザエを後輩のヴィンセント・

ライモイ（スズキ、ケニア）が抑え、初マラソンながら2時間07分01秒の好記録で2位に入った。3位のギザエも2時間07分28秒の自己新を出した。

2人は昨年と同じように、福岡に向けて長野県富士見高原で複数回の合宿を行ってきた。標高約1300mの高地であることに加え、食事もケニアの食材を持ち込み、宿舎の調理師にケニアの調理法を依頼して用意してもらった。スタミナ練習ならギザエが、スピード練習ならライモイが引っ張り、練習のレベルが自然と高くなった。

とはいえ、年間のトレーニングの流れで見れば、2人とも昨年と同じにはなっていない。

●ケニアのナショナルチーム入りしたギザエ

ギザエはこの1年間で、世界陸上ブダペスト（8月）のマラソン・ケニア代表補欠を経験した。「ケニアのナショナルチーム合宿に5月から約3カ月間、行っていました」と藤原新ヘッドコーチ。

8月の世界陸上は走ることができなかったが、世界陸上のケニア勢は8位、14位、途中棄権という成績。「オマエが出ていたらな」と練習パートナーから言われたという。

暑さの中のレースには自信がある。21年の福岡国際は30kmを1時間29分10秒と、2時間5分前後が狙えるペースで通過した。しかし終盤がかなりの暑さになり、ほとんどの選手がペースダウン。そのなかで持ちこたえたのがギザエで、2時間07分51秒と当時の自己記録で優勝した。暑さの中で速い展開にはならない夏の世界大会は、ギザエが勝負しやすい大会だった。22年7月の英連邦大会でも3位（2時間13分16秒）になった実績を持つ。

ギザエは補欠の期間で長く合宿していたため、力を思い切って出すレースに出場していない。藤原ヘッドコーチは「補欠はそういうもの。ケニア陸連合宿は練習メニューも日本でやっているものと違いますが、本人はそこを気にするような選手ではありません」と今季のギザエが置かれた状況を説明する。ケニアのナショナル合宿で40km走を何回も行ったため、「秋口には質の高い距離走は行ってない」ことも大きな違いだ。

ギザエは地元の福岡一高出身で、昨年まで今大会に7回出場してきた。福岡国際への思いは強い。秋の海外マラソンの出場も検討したが、「福岡を狙えなくなってしまう」（藤原ヘッドコーチ）と見送った。

「口にこそしていませんが、パリ五輪代表への思いも持っています」

母国の代表入りをアピールするためにも、得意の福岡国際で強さを見せたい。

●昨年2位のライモイは故障明け

昨年の福岡国際で初マラソンのライモイが2時間07分01秒で2位になったのは、ちょっとしたサプライズだった。優勝したマル・テフェリ（イスラエル）には18秒、約100m差を付けられたが、スズキの先輩のギザエに27秒先着した。

レース前に藤原ヘッドコーチは「スタミナ練習はギザエが強さを見せますが、ライモイの方がスピード練習では強いですね。本人は2時間7分台を目標にしていますが、それ以上に行く可能性がある」と、ライモイの好成績を予想していた。

20年に10000mを27分39秒80、ハーフマラソンを59分51秒で走った。ハーフマラソンは日本記録の60分00秒を上回った。

福岡国際から3カ月後の東京マラソンでは2時間07分23秒で12位。自己記録に22秒届かなかったが、事情を聞けばライモイの大物ぶりがわかる。

「途中、腹痛を起こしてしまいました。かなりの痛みだったようです。（糖質）飲料を飲み過ぎたかもしれません。7分台の選手でないことは、東京の結果で証明してくれたと思います」

しかし、その後思ったレースができなかった。4月のぎふ清流ハーフマラソンは1時間03分09秒の10位。レース中にハムストリングス（大腿裏の筋肉）を痛めてしまった。

「それがクセになってしまったところがある」と藤原ヘッドコーチ。

ライモイは今回は万全な練習が積めているわけではなく後半のスタミナが懸念要素だが、スピードを生かしてリズムに乗ればそのまま突っ走る可能性がある。